



# 経営の散歩道

川中経営研究所  
所長 川中清司

▼われわれがイメージできる数の範囲は、億・兆の次の京(けい)か、分・里の次の毛・糸(し)ぐらいだろう。

しかし、現実には計り知れない単位の世界のなかを漂流している。

果たして人間は、数をあやつってどこまで自然と対峙できるのか。

▼世界の五〇億の人間の中の一つの二人が結ばれて子を生む。

一回の精液の射出量は一ないし六ミリリットル。その一ミリリットルの中にある精子は六千万個で、受精の確率は何億分の一だ。

いま自分がこうしていられるのは、何京分の一というラッキーだ。

夜空に輝く銀河の直径は十万年。ちなみに一光年は約九兆四六七〇億キロメートルの長さだ。

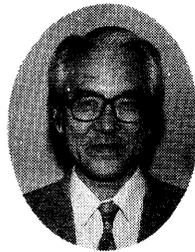
太陽は三〇億年も前から燃え続け、地球にふりそそぐ熱量はわずかにその二〇億分の一にすぎないという。

▼江戸時代の数学者・吉田光由

は数の単位を表す方法を考えた。その中で那由他は一〇の六〇乗、阿曾祇は五六乗というように、仏典の中の数値を用いている。

▼仏典のなかには想像もつかない数値が登場する。

天女が三年ごとに舞い降りて、



## 第二十九回

### 数のロマン

その三

羽衣の袖でそつと四〇里立方の巨岩をなでる。そうして岩が磨滅するまでの期間を却(こう)という。

釈迦が弟子達に問いかける。

「地球をすりつぶして粉にしてその一粒を、五百千万億・那由他・阿曾祇という遠い向こうの星達に落としていく——としたら、どれくらい時間がかかるだろうか」

これに対して弥勒(みろく)

菩薩が「算数や人の考える力では計り知れない、無量無辺なものです」と答える。

自然や真理の大きさを説く法華経・寿命品の一シーンだ。

▼果てしない大宇宙と自分との

かかわり。大きな自然の法則や因縁の中に生かされる不思議さとよるこび。「さあ、希望と勇氣をもつて生きようよ——と

仏陀たちの数千年前の莊嚴な語らいが、目の前にくりひろげられていく。

▼ゼロは何もないことだが、位

ゼロは一と組んでコンピュータを駆使し、今日の情報社会を築き上げた。

▼ゼロは戦いに強く、平和にやさしい性格がある。

ゼロに何を掛けてもゼロにしかならぬ。ゼロはどこまでも自分の「ゼロ性」を貫き戦い続け、どんなものもゼロにしないではおかない。

しかしある数がそつとゼロに加われれば、ゼロは黙って自分の身をひき相手数だけを残す。

▼中東紛争で世界平和の危機がおとされたいま、人々に求められるものはゼロ性の認識ではないのか。

取りを表すという大事な機能をもっている。

ゼロを三つ並べれば千、四つで万を表すように、ゼロは数の秩序を保つための重要な存在だ。

昔は位どりを示す方法は記号や漢字しかなかった。

ゼロを利用したこの記数位は遠く五、六世紀ごろ印度で始まり、アラビアを経て十二世紀にヨーロッパへ、そして全世界に広がっていった。

